
rainy, fine later

高戸 優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

r a i n y , f i n e l a t e r

【Nコード】

N 5 3 5 0 Z

【作者名】

高戸 優

【あらすじ】

主人公、甲斐 謙は音楽が純粹に好きだった。

その思いを持ちながら入学先の高校で廃部となった軽音部を立てなおす。

問題児ばかりの軽音部となってしまうのだが、果たして彼らの行く末は…… 良好な未来なのか、最悪な未来なのか。

運命の出会いって普通入学式にするもんだよね

大抵、運命の出会いってのは入学式とかにするもんだらう。

けれど、彼の運命の出会いは中学の卒業式当日。

奇しくも彼の中学生生活が幕を閉じるその日だった。

「……………ふわーあ……………っと」

とある中学校の卒業式当日。一人の男子生徒が毎日通っていた学校へと足を運んでいた。

周りの彼と同じ学校へと通っている、彼と同学年の者達は皆、登校するための道のりさえも感慨深く思いながら歩んでいた。

しかし、少年も同じ卒業生のはずなのだが何も思っていないらしく、ヘッドホンから流れてくる音楽に耳を傾け欠伸を連発していた。

背は平均身長より少し上くらいで黒髪に灰色より少し濃い、という何とも微妙な色彩の瞳をもつ少年だ。ガ克兰の制服に身を包んでおり、ポケットにはMP3を入れているらしく、コードが伸びて彼の白いヘッドホンへとつながっている。

しゃかしゃか、と流れる音楽を聴きながら彼はゆっくりと歩を進め続ける。

(……あー、だーるーいー……)

そんな事を思いながら歩を進め続け。あと少しで学校、というところで徐にMP3を取り出す。そして今流れているバンドの曲を止めた。

(……んー。最近流行りのバンドの曲だから聴いてみたけど……どうもパツとしないなあ……)

うーん……と彼は歩きながら悩み始める。

(音楽的にはいい。リズムも歌詞も問題なし。けどももっと、こころ……心に響く声というかそーゆーのが無かったんだよなあ……)

確かにこのバンドは総合的に見てもよかったと思う。

リズムが狂っている場所など何もなく、メロディーも綺麗に纏まっており、歌詞も人の心に訴えかけるものばかり。

けど、だからこそ。

(……売れるために書いた曲、って印象を抱いちゃったんだよなあ……)

そう、簡潔に言ってしまうえば。この曲への印象は『売るために書いた曲』なのだ。

そんな印象を抱いてしまった曲にはもう聴く気など全く起きない。

(……違う。僕が求めているのはこんな曲じゃない)頭をぶんぶん、

と振り（書きたい曲。書きたい、つてずっと想っていたそんな曲）

売れなくたっていい。そんな想いで自分が書きたい曲を書き、演奏し、歌った。そんな曲を彼は探し歩いていた。

（それなら自分で曲作れ、つて話だけど……生憎、僕はギターとかベースとかは専門外だから……）

どうやってそんな曲を作ろうか、そう悩んでいた時

ヘッドホンの外側から、透き通った綺麗な声が響いてくる。

その声を聞いた瞬間　彼の中で時間が止まった。

隣を通り過ぎていく楽しそうな女子達の笑い声も。木にとまって囀っている鳥も。これから卒業式へと向かう親の車が通り過ぎていく音も。

全ての音が排除され、その声だけとなる。

淡く、儚い歌声なのだが何所か芯が通っていて。辛そう、悲しそうな歌声なのだがとても楽しそうで幸せそう。子供の様な無邪気さがあるにも関わらず大人の様な妖艶な感じも纏っていて。

一言で言ってしまうば、不思議な声。ウイスパーヴォイス

どれ位聴き入ってたのだろうか。それさえも分らない彼は唐突に意識を取り戻すとダツ！と地面を蹴って走り出していた。

周りの生徒達は先ほどまで気だるげだった彼が唐突に顔を真剣にして走り出したので驚いていたのだが、当の本人はそんなのを気にしている余裕など全くない。

一心不乱に走り、走り、走って。声のした方向　自分の通っていた中学校を目指す。

げた箱へ到着すると急いで皮靴を脱ぎ上履きへと履き替える。踵を入れている時間さえも勿体ないと言うように踵はふんで歩き始めた。

途中で「ちゃんと靴を履きなさい！！　それと廊下は走らない！！」という注意が聞こえたが、それも気にせず廊下を走りぬけた。

急いで階段へと向かい、屋上目指して駆け上がる。一段飛ばしなどを上っていたので所々で転びそうになった。だが、それもギリギリで回避して走り続ける。

そして屋上へと着いたとき。彼の息はとてつもなく切れていた。

ゼーっ、ゼーっ　と荒い息を吐きながら屋上へと続く金属製の扉へと手を伸ばした。

ゆっくりりと、まるで小さな子供がクリスマスプレゼントをあけるように丁寧に扉を押す。

そして、その先では。

小さな声で歌い続ける一人の少女がいた。

ほっそりとした体躯に灰色の髪は太ももまで伸ばしており、きめ細やかな白い肌に淡い茶色い瞳。まるで人形が動きだしたような印象を与えてくる少女だった。

くるくると回りながら、辛そうな表情をしながら。それでも目元や口元は笑っており、頬はほんのりと赤く染まっている。

そんな綺麗な歌声を放ち続ける少女。

彼はその様子に少し見惚れていたが……すぐにはっとなり、少女へと声をかけた。

「そ、そのーちょっといいかな……？」

すると少女はビクッ！ となり、恐る恐る声のした方へと目をやる。彼を視界にとらえるとさーっと顔を青くしながら「……な、何で……」と小さく呟く。

「へ？ 何が？」

「……な、何でバレてしまったんですか……？ 私、小声で歌っていたはずなんですけど……」

おずおずと話している少女の声は、何所までも透き通っていて。

ああ、地声も綺麗な子なんだなあ、と思いつつ「いやー……僕だからこそ、バレちゃったというか……」

「……といますと?」

「……僕、他の人より聴覚が優れまくってるらしくってね」ピツと自分の耳をヘッドホン越しで指しながら「音楽流してる状況でも小さな音も聞こえるんだ」

「そ、そうなんですか……」そこまで言うと少女ははっとして「その……私への用事は何でしょう……?」と遠慮がちに聞いてくる。

「んーっと……本当、唐突に悪いんだけどさ……」

そう言うと彼はすっと手を差し出す。少女がきょとんとした表情で首をかしげていると、少年はにこつと笑み。

これから先の運命を変える言葉を言ってみせた。

「僕の名前は甲斐^{カイ} 謙^{ユズル}。もし暇だったらさ、僕とバンドを組んでもらえないかな?」

「……はい?」

少女は言っている内容がよく分らない、とでもいう風に首を傾げる。

少年 謙はただ笑い続け。手を差し伸べ続けた。

運命の出会いって普通入学式にするもんだよね（後書き）

えっと、二つ目の連載です!!!

お風呂入っている途中で思いついた話でノリで書いてしまいました、
ごめんなさい…。

とりあえず、次回も早めに更新しようと思います!!!

では、この小説もできましたらよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5350z/>

rainy, fine later

2011年12月18日00時48分発行